

サンプル版  
『改稿版 管理される J 官』

作者：金目

## 目次

登場人物紹介

第1話 桜庭昇平はセクスレイヴ(玉責め)

(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第2話 常識改変モード「セクスレイヴが認知される日常」(野外露出)

第3話 セクスレイヴ昇平の公園全裸オナニーショー(野外露出、オナニー)

第4話 ザーメンアゲイン 乳首でイクなんて！(乳首責め)

第5話 射精を見られたくないのなら玉を潰せばいいね？(玉責め)

第6話 勃起させてくれ！(貞操帯)

第7話 チンポで感じるのならチンポでイってみよう！(エロ動画撮影、尿道責め)

第8話 暴走金玉によって溢れ出る射精欲(媚薬、禁欲)

第9話 ザーメン速射散弾チンポ(乳首責め、連続射精)

第10話 飲精禊ぎ(飲精)

第11話 恥愚、ケツバナナの夜(酔っ払い、脱衣、ケツバナナ)

第12話 ケツバナナの夜・裏(ケツバナナ、手コキ射精)

第13話 絆結びのケツバナナ(アナル調教、ケツバナナ)

第14話 トコロテン祝砲依頼(ケツバナナ)

第15話 トコロテン祝砲訓練(アナルセックス)

最終話 祝福のクリ汁ミルクィウェイ(トコロテン射精)

### 【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実には存在する個人・団体などとは無関係です。

無断転載・私的利用の範囲を超えた共有、AI学習など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

## 登場人物

### 桜庭 昇平（さくらば しょうへい）

男性。25 歳。現役 J 官。童貞。

女性経験のないチンポははずる剥けでピンクの亀頭。平常時 12 センチ、勃起時 26.8 センチ。男の高射砲。

益荒男といった風情のマッシュ。

とある理由で酒を控えるようにしている。

### 恩田 賢一（おんだ けんいち）

大学院生。27 歳。昇平の従兄。

不健康一歩手前の痩せ型。近視のため目つきが鋭い。

開発した「セクスレイヴ管理アプリ」によって、昇平を辱め尽くそうとしている。

### 桜庭 武臣（さくらば たけおみ）

男性。32 歳。会社員。

結婚式を控えた昇平の兄。

### 桜庭 大紋（さくらば だいもん）

武臣と昇平の父。妻の志桜里とは死別している。

### 大貫

男性。貿易会社社長。

昇平の近所にするおっさん。精子超速増産剤など、変わった品を取り扱っている。

## 第 1 話 桜庭昇平はセクスレイヴ

「っおああ……」

目を覚ました昇平はぐらつくような眩暈と頭痛に呻いた。

昇平は上半身を起こし、胸を搔いた。

分厚い胸板や硬そうな腹筋は、日々を訓練に費やしてきたことが分かる益荒男ぶりだ。

昇平は、現役 J 官である。

人々の平和な営みを守るという高い志を胸に、日々の訓練を乗り越えてきた証が、雄々しい肉体なのだ。

「っあー、飲み過ぎたな……」

昇平は、周囲を見回し、ぼやいた。

ここは昇平の実家の応接間で、昇平が寝ていたのは来客用のソファだ。  
昇平は兄の武臣の結婚式と披露宴に参列するために休暇を取得し、帰省していたのだ。  
応接間のテーブルや床にはビールの空き缶や酒の空き瓶、空っぽになったツマミの袋などが散乱している。

かなりだらしない飲み会だったことを示す散らかりぶりだ。  
昇平自身、アルコールが残った頭の重さを感じている。  
「しくじったな……」

また、飲み過ぎたか……」  
昇平は大きく溜息をついた。  
昇平は成人式の夜に、酒で大失敗をしたため、飲酒を避けてきた。  
だが、昇平の父である大紋に「親子3人、水入らずで飲めるのも最後だから」とビールを勧められ、飲み会に集まっていた近所のおじさんの大貫にまた1杯勧められ、他のおじさんにも勧められ……と昇平は飲み過ぎてしまった。

溜息をついた昇平は、深酒をした己の愚かさを目の当たりにした。  
昇平の屈強な上半身には、不細工な顔が描かれている。  
胸板に目、鳩尾のあたりに鼻、へその高さに大きな唇が描かれている。  
昇平は、不細工な顔を見て、己が何をしたのかを思い出した。

「飲み会を盛り上げるぞ！」  
そう叫んだ昇平は、全裸になった。  
そして、上半身の毛を剃ってから顔を描き、身体を揺らして裸踊りをしたのだ。

「馬鹿か俺はっ！」  
昇平は、昨晚の己の愚かさを反芻し、怒りと呆れが入り混じる。  
酒によって全裸で踊ったなどと隊の上官に知られたら叱責されるに違いない。  
……全裸。  
「へくしょいっ！」

全裸であることを思い出した昇平は、寒気から大きなくしゃみをした。  
裸踊りをしたあと、そのまま寝落ちした昇平は全裸であった。  
もじゃもじゃと濃いチン毛の茂みから堂々たるデカチンが勃起している。  
学生時代の男友達に「男の高射砲」と称された昇平のデカチンはテーブルの上に置かれた空っぽのビールジョッキよりも背が高い。

ずる剥けの亀頭はピンク色をしており、昇平が童貞であることを喧伝している。  
昇平は壁掛け時計を見る。  
時間は午前7時前だ。  
飲み会で深酒をしていた父の大紋や兄の武臣も、そろそろ目を覚ます頃だろう。  
久しぶりに帰宅した己が、率先して飲み会の片づけをするべきだろう。  
そう考えた昇平は、ソファから降り、昨晚脱ぎ捨てた服を探す。  
テーブルの上、床、飾り棚の上、対面のソファの上など、見回した範囲には昇平の服が見当たらない。

「どこにやっちまったんだ……」

昇平はぼやいてから、テーブルの下を除くために四つん這いになった。

J官として訓練を乗り越えてきた昇平の下半身もがっしりとしている。

ふくらはぎもくっきりとついており、太ももも太く逞しい。

太ももの先には雄肉が凝縮された分厚く、硬そうなケツがあり、ケツには大きなエクボが現れている。

そして、ケツ肉と太ももの間には昇平の玉袋がどどんとぶら下がっている。

陰茎の長さに加え、玉袋から想定される金玉の大きさもあり、昇平の性欲は強そうだ。

昇平はテーブルの下を覗き込み、ビールの空き缶とミックスナッツの空袋が転がっているのを確認した。

腕を伸ばし、テーブルの下から空き缶と空袋を取り出した昇平は、ソファの下を覗いた。

ソファの下には昇平が昨日着用していたスーツやスラックスなどが丸めて押し込まれていた。

誰かがわざとすると昇平には思えない。

恐らく、酔っぱらった昇平が雑に丸めたスーツ類を誰かが蹴飛ばしてソファの下に押しやってしまったのだろう。

昇平はソファの下に丸めて押し込まれていたスーツ類を引っ張り出した。

昇平は立ち上がり、ジャケットとスラックスの状態を確認する。

雑に丸めて押し込まれていたため、ジャケットとスラックスには大きなしわが何本も生じていた。

加えて、ソファの下に押し込まれていたせいで、埃っぽい。

「……即日でやってくれるクリーニング屋を探さないとな。

はあ……どうして俺は酒で馬鹿なことを繰り返すんだ」

昇平は、大きく溜息をついた。

そして、ジャケットのポケットに入れっぱなしになっていたスマートフォンを取り出し、テーブルの上に置いた。

昇平は、丸められたスーツ類の残りから黒のボクサーパンツを取り出した。

ソファの下に押し込められていたため、黒のボクサーパンツも埃っぽい。

だが、全裸で片付けをするのはみっともないし、昇平の部屋に戻るまで勃起チンポをぶらぶらさせるというのもみっともない。

応接間から昇平の部屋への経路には、玄関がある。

玄関前を通るタイミングで誰かが来訪してきたら、朝っぱらから勃起チンポをぶらぶらさせている姿を目撃されてしまう。

「……仕方ないな」

昇平は何度目になるか分からない溜息をついてから埃っぽい黒のボクサーパンツを穿こうと右足を上げた。

だが、昇平の右足は黒のボクサーパンツを通ることなく、床に着地した。

「ありゃ？」

昇平は首を傾げた。

ボクサーパンツに足を通すという単純作業に失敗したことが不思議で仕方がなかったの

だ。

「酒が抜けてないか……」

昇平はもう一度右足を上げ、黒のボクサーパンツに足を通そうとする。

だが、昇平の右足はボクサーパンツを通らずに床に着地した。

「くそー、まだ酔っているのか、俺は」

昇平はぼやいてからソファに座った。

そして、右足を持ち上げ、黒のボクサーパンツとの位置を目視しながらゆっくりと右足を通そうとした。

けれど、昇平の右足はボクサーパンツを通らずに床に着地する。

「……なんでだ？」

昇平は今の状況に納得できない。

パンツに足を通すという単純作業を失敗したことは、昇平にとって今回が初めてのことだ。

昇平の人生において、パンツを穿くコツなんてものを考えたことはない。

それぐらい、昇平にとって、パンツを穿くのは簡単なことなのだ。

だというのに、昇平は黒のボクサーパンツを穿くことができない。

「くそっ……パンツも穿けないとかどうなってるんだよ」

「当たり前だろう、桜庭昇平。」

お前は私の管理下にある。

許しもなく服を着ることなどできるわけないだろう」

己のぼやきに対する声を聴き、昇平は顔を上げた。

「賢一兄」

昇平は応接間に入ってきた賢一の名を呼んだ。

目の前にいる不健康一步手前の痩身の青年の名は、恩田賢一。

近所に住んでいる昇平の従兄であり、入試勉強の際にとってもお世話になった恩人でもある。

冗談を言うこともなく、笑いもしない男だが、実直であり、誠実であり、厳格である賢一のことを、昇平は尊敬している。

賢一は確か、大学院で脳波に関する研究をしているはずだ。

「やれやれ、酒癖が悪いとは知っていたが、まさか、交わした約束すら思い出せないとは…  
…嘆かわしい」

近視のせいで人相が悪い賢一が大袈裟なそぶりで溜息をついた。

「賢一兄、何を言ってるんだ？」

昇平は、賢一が何を言っているのか、理解できない。

交わした約束についても、心当たりがない。

「仕方ないな、昇平。」

これを見なさい」

賢一がタブレットを取り出し、昇平に向かってかざした。

タブレットには、この応接間に多くの人が集まり、酒を飲んでいる様子が映っている。

その中に上半身に不細工な顔を描いた昇平が映る。

昨晚の飲み会の様子を撮影したものようだ……

「久しいね、昇平くん」

「賢一兄！」

賢一に声をかけられた昇平は嬉しそうに声を弾ませている。

「早速ですが、昇平くんに協力してもらいたいことがあります」

「分かりました！ 何でもします！」

酔っばらっている昇平が安請け合いをした。

「では、僕のセクスレイヴになってください」

「セクスレイヴって何ですか？」

酔っばらった昇平が賢一に問いかけている。

「服の着用、自慰行為を含めた性行為の一切を含む、肉体の全てを僕の管理下におかれることです」

「よく分かんないけどー、賢一兄の頼みなら引き受けます！」

酔っばらっている昇平が、何度も何度も大きく頷いている。

「じゃあ、このタブレットに署名をしてください。

ああ、立会人として大紋さんと武臣さんも署名をしてください」

「分かった」

「賢一さんの役に立つんだぞ、昇平」

昇平、父の大紋、兄の武臣が賢一の求めに応じ、タブレットに署名をしている。

タブレットには「セクスレイヴ管理アプリ、機動準備」と表示されていた……

「……いや、確かに昨晚の俺は賢一兄の言うことを聞きましたけど。

セクスレイヴって、その、何かの冗談ですよね？」

賢一に見せられた動画により、昇平は昨晚、賢一の求めに従い、タブレットに署名をしたことを思い出した。

だが、セクスレイヴだなんてまともな案件だとは昇平には思えない。

昇平が知る賢一は、神経質ではあるものの、真面目で厳格な青年であり、そんな悪ふざけをするとは思えないのだ。

「僕が冗談を言うような男だと？」

だが、賢一は、昇平が知る賢一そのままの口調と態度で、冗談であることを否定する。

「では、昇平が既に僕の管理下にあることを実体験してもらいましょう」

賢一がそう告げると、タブレットを取り出した。

タブレットには「セクスレイヴ管理アプリ」と表示され、全裸の昇平の姿が映し出されている。

今ここにいる昇平との違いは、上半身に不細工な顔が描かれていないことと、チン毛やすね毛など、首から下の体毛がないことだ。

賢一がタブレットに表示された昇平のチンポを指でなぞり始めた。

「おふう！」

昇平が前屈みになり、勃起チンポを両手で覆った。

触れられていないはずなのに、亀頭から陰茎の付け根に向かって何度も何度も愛撫され、射精欲が煽られているのだ。

「なっ！ なほおお！ なんぞっ！」

昇平は前屈みになり、両手で勃起チンポを覆い、守ろうとする。

だが、それでも不可視の愛撫を防ぐことはできず、昇平の鈴口からは我慢汁がにじみ始める。

「僕が、君の肉体を管理しているのだから当然でしょう」

賢一が呆れた様子で呟くと、タブレットをなぞっていた指を離した。

「あ……はあ……はあ……」

愛撫が止まったことに安堵した昇平は、荒い呼吸を繰り返す。

訳が分からない。

昇平の心は困惑と恐怖で満たされる。

昇平と賢一の間には相当の距離がある。

それに、賢一は昇平の勃起チンポには触れていない。

それなのに、勃起チンポを愛撫され、射精欲を煽られた原因が昇平には分からない。

まさか、本当にあのタブレットで昇平の肉体が管理されているというのか！

「分かりましたね、昇平くん。

君は僕の管理下にある所有物である。

このセクスレイヴ管理アプリが機能している限り、君の肉体は僕の所有物であり、服を着せるかどうかは、僕が決めることである」

賢一の宣告の意味は、昇平には分からない。

昇平が尊敬している賢一は、実直であり、誠実であり、厳格な青年だ。

間違っても、誰かを所有するなどという妄言を口にしたりはしない。

……昇平は思いついた。

あのアプリが原因なのではないか、と感じた。

セクスレイヴ管理アプリのせいで、賢一はおかしくなったのだ！

そう考えた昇平はテーブルを飛び越え、賢一に急接近する。

あのタブレットを叩き壊せば、賢一が正気に戻ると思ったのだ。

現役J官として訓練を乗り越えてきた昇平の逞しい裸体の躍動により、昇平は賢一の眼前まで迫る。

昇平の目の前で賢一がタブレットの画面をタップした。

どごん！

「ぎゃん！」

金玉を殴打された衝撃によって、昇平は大きく身体を仰け反らせ、濁った悲鳴を上げた。

賢一のタブレットを奪うはずの昇平の両手は金玉を守るように包んだ。

昇平は金玉を両手で覆ったまま、周囲を見回した。



賢一がリズムカルにタブレットをトトントンとタップした。

だが、賢一がタブレットをタップした分、昇平の金玉が殴打されるのだ。

「どうして……こんなことをするんですか……賢一兄はこんなことをする人じゃないですよね？」



俺の金玉が潰れちゃった！

昇平は、金玉を潰されたと確信する。

昇平の人生において、もっとも深く、重く、無慈悲な激痛が昇平の股座から長く、陰惨に響いている。

激痛は留まることなく、昇平の涙と鼻水と涎もだらだらと流れ続けている。

うずくまり、震える全裸の昇平の姿は哀れなものであった。

現役J官として鍛え抜かれた立派な肉体でさえ、昇平を守ることは叶わなかった。

理不尽な方法によって金玉を責め抜かれた昇平がすすり泣く様子は、圧倒的強者の屈服というドラマに満ちている。

昇平は、金玉を潰された絶望に震え、泣き続ける。

賢一は、昇平が理不尽な暴力によって打倒された姿を嗤って見下していた。

「ううう……おおあ……」

泣きつかれた昇平は、涙を拭うために手を使おうとした。

昇平は己の金玉を守るために両手で覆っていた。

その手を動かしたことで、昇平は玉袋の中に確かな感触があることに気がついた。

「あ……」

昇平はぎゅっと締めていた足を開いた。

昇平の両手は昇平の金玉を覆っている。

昇平は、両手をゆっくりと離した。

昇平の股間には萎えた陰茎と玉袋、玉袋を押し上げる金玉の様子が見える。

「あ……ああ……」

昇平は、そっと玉袋に手を伸ばす。

昇平の指先が玉袋を押し上げる金玉の感触を受け取った。

「ああ！」

昇平は歓喜の声をあげ、己の金玉を両手の指で触る。

確かにある！ 金玉がある！

俺の金玉が確かに！ ここに！ 存在している！

「やったあああああああああああああ！」

昇平は立ち上がり、喝采をあげた。

トントんと飛び跳ねる昇平の股間ではチンポがバルンボルンと跳ねる。

「喜ぶのは早いぞ、セクスレイヴ」

賢一の冷たい声で、昇平は現実に戻された。

昇平の金玉を理不尽な方法で責め立てていたのは、賢一だということを昇平は思い出した。

「懲罰モードの殴打変換の上限は6000%だ。

この状況でタップをしたらどうなるだろうな」

賢一の宣告に、昇平は内臓を握られたかのような恐怖を覚えた。

「お、俺をどうするんですか、賢一兄……」

昇平は恐怖に震えながら賢一に問う。

「言っただろう、お前はセクスレイヴだ。

排泄行為だけは自由にさせてやる。

だが、服の着用、自慰を含めた一切の性行為、桜庭昇平の肉体の全ては僕の管理下にある。

桜庭昇平は、僕のセクスレイヴとして、僕の意志に従うのだ」

賢一の宣告は、昇平にとって狂気の産物であり、承服できないものであった。

昇平には分らない。

実直であり、誠実であり、厳格である賢一がどうしてこんな恐ろしいことを始めたのか。

けれど、昇平は体感している。

賢一の手にはセクスレイヴ管理アプリがある限り、昇平は賢一に逆らうことはできない。

昇平は、賢一に従うしかないのだ。

「……わ、分かりました」

昇平は、賢一に服従することを選んだ。

金玉を潰されたと錯覚するような強烈な激痛を味わった昇平では、賢一に逆らうことはできなかった。

「では、公園に行こう。

セクスレイヴ、そこでお前はオナニーを見物してもらえ」

賢一の宣告は、昇平にとって受け入れがたいことであった。

昇平は、己の性行為を見せびらかす趣味はない。

オナニーを見知らぬ誰かに見せるなんて、考えたこともない。

だが、昇平は賢一に逆らえない。

金玉を潰されるかのような激痛を味わった昇平に、賢一と戦う勇気を持てるはずがない。

「分かりました」

だから、昇平は公園でのオナニー披露を受け入れるしかなかった。

## 奥付

サンプル版 『改稿版 管理される現役J官』

初出：2025 年 11 月 26 日

作者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

[https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker\\_id/RG01002299.html](https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html)

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

[https://twitter.com/chigaya\\_deep](https://twitter.com/chigaya_deep)